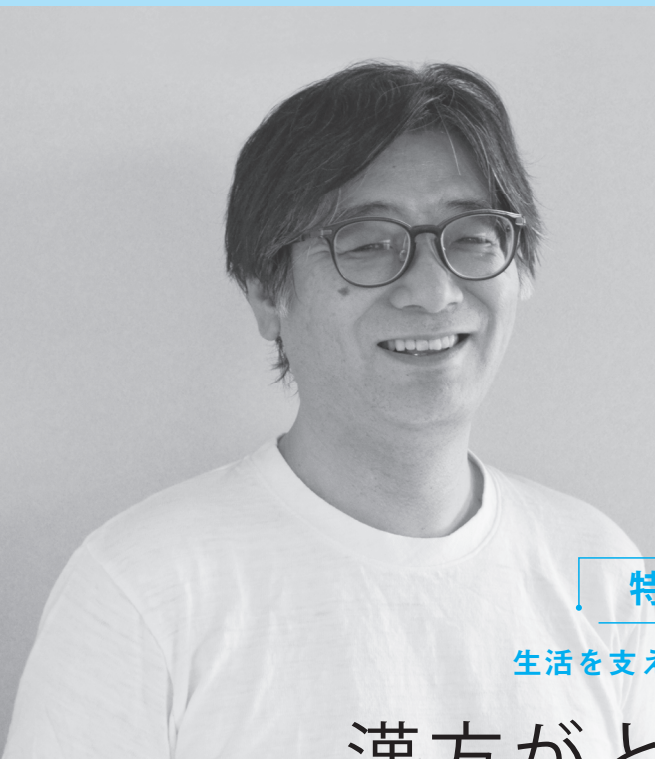




山口診療所 院長

山口 竜司 先生

1990 年 大阪市立大学医学部 卒業
1992 年 同大学医学部附属病院
1993 年 大阪府立羽曳野病院
(現・呼吸器・アレルギー医療センター)
1999 年 山口診療所 院長

特集

生活を支える在宅医療

漢方がととのえる 「食う・寝る・出す」

2025 年には「団塊の世代」が 75 歳以上の後期高齢者となり、人口の約 3 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者になるとの予測がある。そうした超高齢社会において、なんらかの疾病を抱え、医療機関に赴くことが困難な高齢者等が自宅で医療を受けられる在宅医療の果たす役割は大きい。長年にわたり在宅医療の最前線で活躍されている山口竜司先生に在宅医療の現状や漢方の役割などについて取材を行った。

在宅医療は地域で行うチーム医療

取材の当日、診療所の事務長から「急患が出て予定している時間からの取材は難しいかもしれません」というメールがあった。24 時間、患者の容態の変化に対応する診療所での日常を取材前から垣間見ることとなった。

当日の様子について山口先生は、次のように話された。

「午前 10 時くらいにご家族から、患者さんの

様子がおかしいと連絡がありましたが、私は外来の診療中でしたので往診することができませんでした。そうしたときは、まず院内の看護師が家族に様子をおうかがいして、患者さんの担当の訪問看護ステーションに訪問を依頼することもありますし、緊急を要すると判断した場合には、すぐに救急搬送をすることもありますし、ケースバイケースです。今朝、連絡があったお家は、老老介護の世帯で、患者さんのしんどい状況を上手く伝えられなかったこともあり、先に当院の看護師が患者さんの状態の確認に向かいました。看護師が